

家族システム = SALAD モデルに関する家族心理学的研究

— 4 種類の家族スタイルと家族 PM 尺度理論との関連性について —

小野寺 哲 夫

職業教育研究開発センター客員研究員
立正大学経済学部

Family psychological study on Family SALAD Model

— Examination of relation between four types of Family SALAD Model and Misumi's PM theory —

Onodera Tetsuo

Vocational education center of research and development
Rissho University Faculty of economics

Abstract : The purpose of this study is to examine the relation between Family SALAD Model and the PM theory. Based on the work of Kurt Lewin and Friedrich A. Hayek, Family SALAD Model was originally invented by Onodera (2017).

Subjects were 221 healthy under-graduates who had given the questionnaire composed of Family SALAD Model Scale and family PM Scale etc. and answered it.

As a result of the statistical analysis, it was shown that there were significant correlations between Family SALAD Model and the family PM Scale. For instance, it was shown that spontaneous order family system were positively correlated to democratic family system, P scale and M scale of family PM Scale and negatively correlated to autocracy family system and anarchy family system.

This study suggests that Family SALAD Model might have potential benefits of examining family climate or family system empirically.

Key Words : Family SALAD Model, Spontaneous Order, PM theory, Triangulation, Parental Alienation

抄録 : 本研究では、K. レヴィンらの「アイオワ実験」から影響を受けつつ、F. A. ハイエクの自生的秩序論などに基づいて開発された4種類の家族システムからなる家族 SALAD モデルと三隅の PM 理論との関連性について実証的に検討を行った。

221名の大学生を対象とした質問紙調査で、家族 SALAD モデル尺度、家族 PM 尺度、三角形化指標、片親疎外指標などの項目を検討した。分析の結果、家族満足度高群は、低群と比べて、自生的秩序的家族と民主的家族においては有意に高く、独裁的家族と自由放任的家族、三角形化指標、片親疎外指標においては有意に低かった。また、相関分析から、自生的秩序的家族と民主的家族は正の相関を示し、家族 PM 尺度とも正の相関が認められ、独裁的家族と自由放任的家族は正の相関を示し、家族 PM 尺度とは負の相関が認められた。本研究を通して、家族 SALAD モデルと三隅の PM 理論間において高い整合性が認められた。

キーワード : 家族 SALAD モデル、自生的秩序、PM 理論、三角形化、片親疎外

【はじめに】

家族心理学は、家族を1つのシステムとして捉えて研究する分野である。家族システムとは、家族を個人だけではなく家族成員間、世代間の相互作用として機能するひとつのまとまり、すなわちシステムのことである。

茂木(1996)は、「健康な家族」の特徴を検討し、家族システムの安定性を健康な家族の特徴であるとした¹⁴⁾。そして、それを測定する尺度として、「凝集性」、「相互・個性」、「コミュニケーション」、「雰囲気」からなる肯定的家族観尺度を作成した。

家族システムを測定・分類する尺度として最も使用されてきたのは、オルソン(David H. Olson,1989)によって開発されたFACES III(Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III)¹³⁾であろう。この尺度は、オルソン円環モデル(Circumplex Model)とも呼ばれ、それまでの家族研究に用いられた概念をシステム論の立場から比較分類して整理し、家族評価・家族診断に有効な尺度として作成されたものである。円環モデルでは、家族システムの機能を「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3次元で捉え、凝集性(Cohesion)次元は「家族成員間の情緒的絆」、適応性(adaptability)次元は「状況的・発達のストレスに応じて、勢力構造や役割を変化させる夫婦・家族システムの能力」、そしてコミュニケーション(communication)次元は「凝集性と適応性の両次元を促進させる働きを持つ要因」と定義されている。

家族心理学では、これまで家族システムを把握するための多くの尺度が開発されてきたのだが、そのどれもが、フーコーやハイエク、中川らの政治思想⁶⁾¹²⁾に照らすと、家族というものをあまりにもニュートラルなシステムであると前提し過ぎていると考えられる。現実の家族は、価値中立的なものではなく、家族成員同士が日々各々の感情や思惑(意図)をおつけ合っている、いわば政治的な組織であるということが出来る。しかし、このような観点からこれまでの家族尺度を眺めてみると、政治的な組織としての家族の現実を正しく把握できる尺度は未だ存在しない。そこで、社会心理学者でもあり、この10年間、18世紀から現代までの主要な政治哲学・思想の古典を渉猟してきた筆者は、レヴィン(Kurt

Lewin)らの研究を基礎としつつ、家族システムを新しい角度から把握できる家族モデルとして開発したのが、家族システム=SALADモデル(以下、家族SALADモデルと表記)¹⁴⁾である。

家族SALADモデルは、レヴィンらの研究グループによって行われた「アイオワ実験」という記念碑的研究を端緒としている⁹⁾。レヴィンとホワイト(Ralph K. White)、およびリップット(Ronald Lippitt)によってなされた「アイオワ実験」においては、民主制、独裁制、自由放任という3種類の社会風土におけるリーダーの行動と成員の反応を実験的に検討した(図1)。

レヴィン亡き後もホワイトとリップットによってこの研究は継続され、1960年に『独裁制と民主制:実験的探求』という著書にまとめられている¹⁸⁾。これらの研究成果を要約すると、まず10歳の少年5人からなる集団を複数作り、同一の工作の課題を与え、各集団に1人ずつ大人のリーダーを割り当て、一定時間毎に交代するようにした。その際、リーダーは、「独裁的」「民主的」「自由放任的」な言動で対応した。その結果、独裁制では、(1)仕事の量は最も多いが、子供たちの中で敵対行動、いじめ、不平不満、依存的行動が多かった。(2)個性が抑制され、会話が単調なものになった。

民主制では、(1)仕事の量は多くないが、独創性が高く、仲間意識も高く、友好的発言が多く、満足度も高かった。(2)集団内の人間関係が促され、子供同士の褒め合いや、仲の良いふざけあい、集団意識が高くなった。

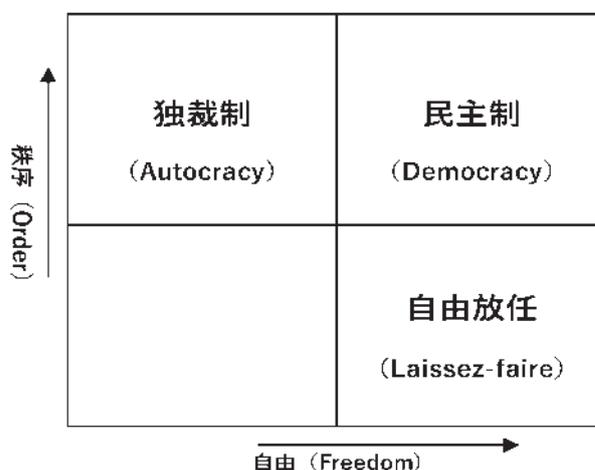


図1 アイオワ実験における3つの社会風土

自由放任では、(1) 仕事の量、質ともに劣っていた。(2) 遊んでいる時間が長く、グループのまとまりがなく、白けていた。

まとめると、仕事量（作業効率）は、独裁制が短期的には最も高かったが、長期的には民主制と大差はなかった。したがって、レヴィンは、作業の質、作業意欲、友好的な行動などを総合的に判断した結果、民主制が最も効果的で望ましい体制であるとした。

三隅二不二（1984）によって実証的に定式化されたリーダーシップ理論である PM 理論も、アイオワ実験から多大な影響を受けている¹⁰⁾。PM 理論は日本を代表するリーダーシップ理論の 1 つであり、この理論においては、リーダーシップを P（Performance：目標達成能力）と M（Maintenance：集団維持能力）の 2 つの能力要素で構成されるとし、目標設定や計画立案、メンバーへの指示などにより目標を達成する能力（P）と、メンバー間の人間関係を良好に保ち、集団のまとまりを維持する能力（M）の 2 つの能力の大小によって、4 つのリーダーシップ・スタイル（PM 型、Pm 型、pM 型、pm 型）があるとし、P と M が共に高い状態（PM 型）のリーダーシップが最も望ましいとした¹⁰⁾。本研究では、両親を子どもに対するリーダーと見立て、三隅によって開発された PM 理論を家族研究に適用した家族 PM 尺度¹⁰⁾を検討する。

このように「アイオワ実験」は、社会科学分野の様々な理論や研究に陰に陽に多大なるインスピレーションを与えてきた。「家族 SALAD モデル」の開発においても例外ではない。「家族 SALAD モデル」の場合は、それに加えて、デヴィッド・ヒューム（David Hume）¹²⁾ やアダム・スミス（Adam Smith）¹²⁾、エドモンド・バーク（Edmund Burke）¹²⁾、アダム・ファーガソン（Adam Ferguson）⁶⁾ などのスコットランド啓蒙思想⁶⁾ やフリードリッヒ・フォン・ハイエク（Friedrich August von Hayek）の著作^{5) 6) 15)} などの哲学・思想（政治・経済・法学）の知見が加わっているという点に特徴がある。

家族 SALAD モデルでは、保守主義知識人のピーター・ドラッカー（Peter Ferdinand Drucker）による瞠目の著作『産業人の未来』²⁾ に倣い、家族モデルとしては、敢えて保守（Conservative）思想を明確に取り込み、つまり左右の思想をバランス良く取り入

れた斬新なモデルとなっている。

家族 SALAD モデルでは、ハイエクによって主張された真の個人主義と偽りの個人主義の議論で知られる方法論的個人主義（Methodological Individualism）と自生的秩序論（Spontaneous Order）に基づいている⁶⁾。

ハイエクによると、家族や市場、言語等の社会制度の多くは、人間の設計（デザイン）によって意図的に作られたものではなく、人間活動の中で長い年月を通して形成されてきた自生的秩序であるということである^{6) 12)}。したがって、家族システムも、誰かによって人工的に設計されたものでもなければ、ポストモダン論者のように、言語的に構築されたものでもなく、はたまた全くの自然状態から突然生まれ出てきたものでもなく、ある特定の社会の中における人間活動の長い歴史を通して意図せざる結果として徐々に成長・発展してきた制度である。

家族 SALAD モデルは「アイオワ実験」における民主制、独裁制、自由放任に、「自生的秩序」を加えた 4 つの家族システム（家族スタイル）として考案された¹⁴⁾。そして、4 つの体制それぞれの頭文字を取って SALAD（サラダ）と名づけられた（図 2）。

以下に 4 種類の家族システムについて説明する。家族 SALAD モデルの 1 つ目は、自生的秩序的（Spontaneous Order）家族である。これは 4 つの中で唯一、過去（歴史や伝統、先祖など）や道徳／慣習とつながっている家族システムである。先述のように、家族は人間の設計によって人工的に作られたものではなく、長い歴史の中で、自生的に発展してきた秩序であり、したがって柳田民俗学^{16) 19)} がその

独裁的家族 A (Autocracy)	自生的秩序的家族 S (Spontaneous order)
民主的家族 D (Democracy)	自由放任的家族 L A (Laissez-faire)

図 2 家族システム = SALAD モデル（小野寺，2015）

本質を見事に記述したように、先祖に感謝し、先祖から継承した慣習（家訓）を守り、家の永続、子孫繁栄を目指すのがこの家族システムである。

家族SALADモデルの2つ目は、独裁的 (Autocracy) 家族で、父親か母親のどちらか一方が権力＝主導権を握っていて、全体主義国の独裁者のように家族内で起こる事の解釈≠意味づけから何をどうするか、までを完全に決定してしまっていて、従属的な家族成員は、制裁を恐れて権力者に反抗したり、自由に意見を表明できないような家族システムである。

家族SALADモデルの3つ目は、自由放任的 (Laissez-faire/Anarchy) 家族で、家族内に共有されているルールが全くなく、両親が子どもをほったらかしていたり、親が親としての役割をきちんと果たしていなかったり、家族全員がバラバラで、各々が好き勝手にやっているが、相手の意に反した行動を誰かが取ったときには、突然気まぐれ的に理不尽に怒りをぶつけたり、暴力や虐待のような度を越した制裁を加えたりするような家族システムである。

家族SALADモデルの4つ目は、民主的 (Democracy) 家族で、家族のことは何でも、家族全員で自由に発言して、家族のルールなども含めて話し合いで決めていくような、平等でリベラルな家族システムである。

先述のように、「アイオワ実験」においては、民主制が最も望ましい体制とされていたが、家族SALADモデルにおいては、自生的秩序的家族が、家族の繁栄、持続可能性、凝集性、秩序性、世代継承性などの点において最も望ましい家族システムであると仮説している。この点に関しては、大学生を対象に小野寺 (2018) によってなされた家族SALADモデルを扱った先行研究¹⁴⁾によると、民主制≒民主的家族が4つの家族システムの中で最も望ましい家族システムであることが示されている。

以下に、本研究で検討する家族心理学分野の専門用語について説明する。

1つ目は三角形化 (Triangulation) で、多世代家族療法の父であるマレー・ボーエン (Murray Bowen) によって提唱された理論的概念である^{4) 8)}。ボーエンによれば、夫婦のように2者で構成される対人システムは、不安をシステム内に留めておく容量が小さいことから情動的に不安定であると考えられる。したがって、外的圧力等の影響を受けやすく、葛藤や感

情遮断 (Emotional Cutoff) が生じやすいとする。そしてその際、2者の片方、あるいは両方が、第三者を巻き込んでシステムの安定を図るとする。第三者を巻き込むとは、具体的に、夫婦であれば、妻、あるいは夫が、子どもに向かって配偶者の不満や悪口などを吹き込み、子どもを自分の側に付けるか同盟を結ぶことを意味する。なお三角形化は、2者関係システムが不安定になったときに自動的に起こる現象であり、良いも悪いも無いのであるが、対人葛藤を悪化させる効果があり、最終的には、夫婦であれば片親疎外 (後述) や離婚を促進してしまうとされている。

2つ目は片親疎外 (Parental Alienation、略称PA) で、これは1980年代初めにリチャード・A・ガードナー (Richard A. Gardner)³⁾ によって提唱された用語で、両親の離婚や別居などの原因により、子供を監護している方の親 (監護親) が、もう一方の親 (非監護親) に対する誹謗や中傷、悪口などマイナスなイメージを子供に吹き込むことで教唆し、子供を他方の親から引き離すようし向け、結果として正当な理由もなく片親に会えなくさせている状況を指す³⁾。すなわち、片親疎外とは、子供が片方の親 (監護親) から、もう片方の親 (非監護親) の悪口などを聞かされたり、交流を断絶されることで、もう片方の親 (非監護親) との交流を拒絶するようになってしまうことである。『離婚毒』の著者であるリチャード・ウォーシャック (Richard A. Warshak) によると、その心理的メカニズムは、離婚や別居で一方の親が子どもから離れると、その子供は同居親から見捨てられる不安と恐怖を強く抱いて、徐々に同居親の心理に同調するようになる¹⁷⁾。このようにして同居親が非同居親を憎み嫌う心理が子どもに伝染・影響すると考えられている。すなわち、子どもには同居親から見捨てられないために本能的に同居親を守ろう、喜ばせよう」という過剰適応の心理が働き、同居親の心理に同調して、自ら非同居親の存在を否定するようになっていくとする。家族療法家のゴトリエブ (Linda J. Gottlieb)⁴⁾ は、家族療法における先述の三角形化概念はボーエンが嚆矢であることと、三角形化と片親疎外との密接な関連について指摘している⁴⁾。

最後に本研究で検討するいくつかの指標について

も説明しておきたい。1つは、家族保守尺度であるが、これは先祖供養や墓参りを大切にし、家族の幸せや永続を求める度合い測定したものである。2つは、フェミニズム指標で、伝統的な性役割分業に反対し、離婚や再婚、およびLGBT、同性婚、事実婚に賛成する度合いを測定するものである。

【目的】

本研究の目的は、家族 SALAD モデルに基づいた4種類の家族システムと三隅(1984)によって開発された家族 PM 尺度、および家族満足度、三角形化指標、片親疎外指標、家族保守尺度、フェミニズム指標との関係性について検討し、それによって、家族満足度が高く、三角形化や片親疎外が少ない家族システム(スタイル)はどのスタイルかについて探求することである。

【方法】

調査対象者：大学学部生の男女221名(男子153名、女子68名、 $M=18.29$ 歳、 $SD=0.54$)。

質問紙法：フェイスシート(性別、年齢、家族構成)、家族 SALAD モデル尺度(3件法：80項目)¹⁴⁾、家族 PM 尺度短縮版(4件法：10項目)¹⁰⁾、家族保守尺度短縮版(4件法：7項目)¹⁴⁾、フェミニズム指標(4件法：7項目)¹⁴⁾、三角形化指標(7件法：2項目)と片親疎外指標項目(7件法：3項目)、家族満足度尺度(0~100点の自由記述：1項目)で測定された。

本研究で使用された家族 SALAD モデル尺度の4

つの下位尺度(自生的秩序的家族、独裁的家族、自由放任的家族、民主的家族)の項目例を付録1に添付した。

【倫理的配慮】

本研究は、敬心学園職業教育研究開発センター研究倫理審査専門委員会の承認を得ている(承認番号：敬職19-21)。

【結果】

1. 家族満足度の高低群における4種類の家族システムの記述統計量

全体データ、家族満足度(居心地の良さ)80点以上群、50点以下群において、4つの家族システムごとの記述統計量(平均値・標準偏差)を算出して表1に示し、図3に家族満足度80点以上群、図4に家族満足度50点以下群のグラフを示した。

表1より、全体データにおいては、自生的秩序的家族得点が35.21、独裁的家族が13.76、自由放任的家族が16.20、そして民主的家族が34.29であった。このように全体データにおいては、得点が高い順に、自生的秩序的家族→民主的家族→自由放任的家族→独裁的家族という順番であった。

図3と図4の検討から、家族満足度が80点以上群のグラフと50点以下群のグラフの形体は大きく異なっていることが示された。具体的には、家族満足度が80点以上群のグラフは、横幅が狭い縦長の形体になっているのに対し、50点以下群のグラフは、横に大きく膨らんだひし形の形体であった。すなわ

表1 全体データ、家族満足度80点以上、50点以下群の記述統計量

家族SALADモデル (家族システム)		全体	家族満足度 (居心地の良さ) 80点以上	家族満足度 (居心地の良さ) 50点以下
		($n=223$)	($n=132$)	($n=53$)
自生的秩序家族	平均値	35.21	37.73	30.19
	標準偏差	7.64	6.56	7.73
	最小値	20	22	20
	最大値	53	53	43
独裁的家族	平均値	13.76	10.52	19.83
	標準偏差	8.83	7.32	10.02
	最小値	1	1	5
	最大値	44	34	44
自由放任的家族	平均値	16.20	12.48	24.40
	標準偏差	8.72	7.41	6.63
	最小値	0	0	16
	最大値	38	29	38
民主的家族	平均値	34.29	37.92	26.83
	標準偏差	9.58	7.97	8.40
	最小値	9	17	18
	最大値	54	54	44

※家族満足度(居心地の良さ)とは、調査協力者の家族満足度(居心地の良さ)を100点満点で評価した得点を示す。

ち、家族満足度が50点以下群は、80点以上群よりも、独裁的家族と自由放任的家族の得点が大幅に高いことが示唆された。

2. 4つの家族システムと家族PM尺度間におけるピアソンの相関係数 (r) の算出

家族SALADモデルの4つの家族システムと家族PM尺度間で、ピアソンの相関係数 (r) を算出した。その結果、多くの有意な相関が認められた (表2)。

表2より、自生的秩序的家族と正の相関が認められたのは、民主的家族 (r=.313) と家族PM尺度のP尺度 (r=.472) とM尺度 (r=.531) で、負の相関が認められたのは、自由放任的家族 (r=-.506) であった。

独裁的家族と正の相関が認められたのは、自由放任的家族 (r=.370) と家族PM尺度のP尺度 (r=.185) で、負の相関が認められたのが、民主的家族 (r=-.598) と家族PM尺度のM尺度 (r=-.255) で

あった。

自由放任的家族と正の相関が認められたのは、独裁的家族 (r=.370) のみで、負の相関が認められたのが、自生的秩序的家族 (r=-.506)、民主的家族 (r=-.346)、家族PM尺度のP尺度 (r=-.342) とM尺度 (r=-.482) であった。

民主的家族と正の相関が認められたのは、自生的秩序的家族 (r=.313) と家族PM尺度のM尺度 (r=.587) で、負の相関が認められたのが、独裁的家族 (r=-.598)、自由放任的家族 (r=-.346) であった。

3. 家族満足度80点以上群と50点以下群間における4つの家族システム、三角形化指標、片親疎外指標のt検定結果

家族満足度80点以上群と50点以下群間における4つの家族システム、三角形化指標、片親疎外指標得点において対応のないt検定で検討したところ、全てにおいて有意差が認められた。その結果を表3

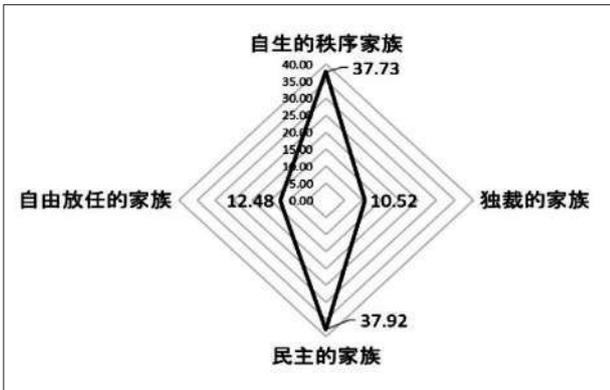


図3 家族満足度 (居心地の良さ) 80点以上群における4つの家族システムの平均値

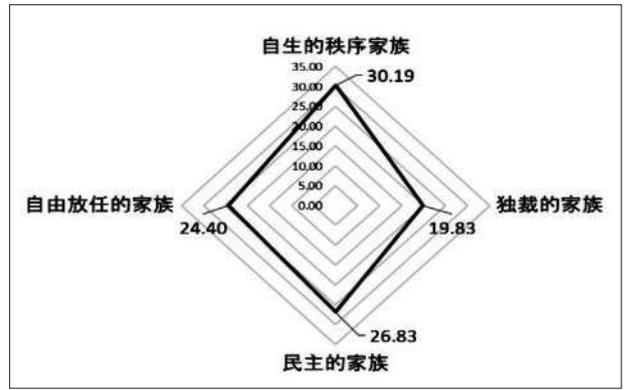


図4 家族満足度 (居心地の良さ) 50点以下群における4つの家族システムの平均値

表2 家族SALADモデルの4つの家族システムと家族PM尺度間におけるピアソンの相関係数 (r)

家族SALAD	自生的秩序	独裁的家族	放任的家族	民主的家族	P尺度	M尺度	平均値	標準偏差
自生的秩序的家族	—	-.004 n.s.	-.506 ***	.313 ***	.472 ***	.531 ***	35.21	7.64
独裁的家族		—	.370 ***	-.598 ***	-.185 **	-.255 ***	13.75	8.83
自由放任的家族			—	-.346 ***	-.342 ***	-.482 ***	16.20	8.72
民主的家族				—	.104 n.s.	.587 ***	34.30	9.58
家族PM P尺度					—	.609 ***	12.38	3.60
家族PM M尺度						—	12.74	3.41

※ *** p<.001, ** p<.01

表3 家族満足度が80点以上群と50点以下群間における t 検定結果

家族SALADモデル	家族満足度	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
自生的秩序家族システム	80点以上	37.73	6.56	6.703	0.000 ***
	50点以下	30.19	7.73		
独裁的家族システム	80点以上	10.52	7.32	-7.000	0.000 ***
	50点以下	19.83	10.02		
自由放任的家族システム	80点以上	12.48	7.41	-10.186	0.000 ***
	50点以下	24.40	6.63		
民主的家族システム	80点以上	37.92	7.97	8.427	0.000 ***
	50点以下	26.83	8.40		
三角形化指標 (合計)	80点以上	4.37	2.80	6.629	0.000 ***
	50点以下	7.83	4.06		
片親疎外指標 (合計)	80点以上	4.22	3.15	-6.373	0.000 ***
	50点以下	8.36	5.57		

※1 家族満足度80点以上(n=132)、50点以下(n=53) ※2 df=183 ※3 *** p<.001

に示した。

表3より、家族満足度80点以上群は50点以下群と比べて、自生的秩序的家族と民主的家族において有意に高かった(自生的秩序的家族:t=6.703, df=183, p<.001、民主的家族:t=8.427, df=183, p<.001)。それに対して、家族満足度80点以上群は50点以下群と比べて、独裁的家族と自由放任的家族においては有意に低かった(独裁的家族:t=7.000, df=183, p<.001、自由放任的家族:t=10.186, df=183, p<.001)。

三角形化指標と片親疎外指標においては、家族満足度50点以下群が80点以上群と比べて有意に高かった(三角形化指標:t=6.629, df=183, p<.001、片親疎外指標:t=6.373, df=183, p<.001)。

4. 4つの家族システムと家族PM尺度を説明変数にした各従属変数へのステップワイズ重回帰分析結果

最後に、家族SALADモデルの4つの家族システムと家族PM尺度を説明変数として投入し、(1) 家族満足度、(2) 家族保守尺度、(3) フェミニズム指標、(4) 三角形化指標、(5) 片親疎外指標を従属変数にしてステップワイズ重回帰分析を行い、標準偏回帰係数(β)と決定係数(R²)を算出した。その結果を図5から図9に示した。

図5より、家族満足度にプラスの因果的な影響を与えていたのは、標準偏回帰係数(β)の大きい順に、民主的家族(β=.262)と自生的秩序的家族(β=.125)であり、マイナスの影響を与えていたのは、自由放任的家族(β=-.444)と独裁的家族(β=-.262)であった(R²=.615)。

図6より、家族保守尺度にプラスの因果的な影響

を与えていたのは、標準偏回帰係数(β)の大きい順に、自生的秩序的家族(β=.505)と家族PM尺度のM尺度(β=.367)であり、マイナスの影響を与えていたのは、民主的家族(β=-.172)であった(R²=.478)。

図7より、フェミニズム(リベラル)指標にプラスの因果的な影響を与えていたのは、標準偏回帰係数(β)の大きい順に、民主的家族(β=.302)と独裁的家族(β=.236)であり、マイナスの影響を与えていたのは、自生的秩序的家族(β=-.478)であっ

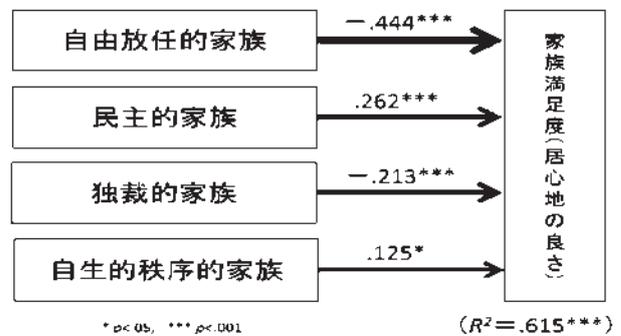


図5 家族SALADと家族PM尺度を説明変数とした家族満足度(居心地の良さ)へのステップワイズ重回帰分析結果(n=221)

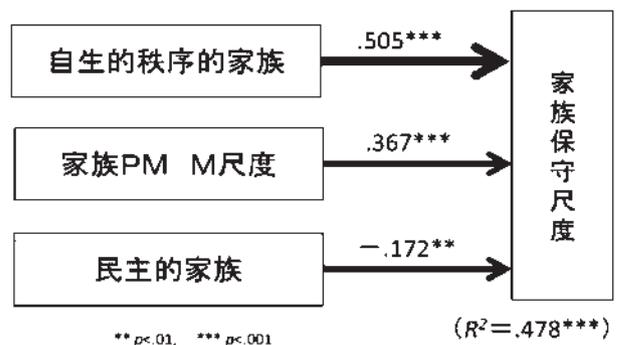


図6 家族SALADと家族PM尺度を説明変数とした家族保守尺度へのステップワイズ重回帰分析結果(n=221)

た ($R^2=.190$)。

図8より、三角形化指標にプラスの因果的な影響を与えていたのは、標準偏回帰係数 (β) の大きい順に、独裁的家族 ($\beta=.434$) と民主的家族 ($\beta=.367$) であり、マイナスの影響を与えていたのは、自生的秩序的家族 ($\beta=-.436$) であった ($R^2=.213$)。

図9より、片親疎外指標にプラスの因果的な影響を与えていたのは、標準偏回帰係数 (β) の大きい順に、独裁的家族 ($\beta=.444$) と民主的家族 ($\beta=.322$) であり、マイナスの影響を与えていたのは、自生的秩序的家族 ($\beta=-.460$) であった ($R^2=.241$)。

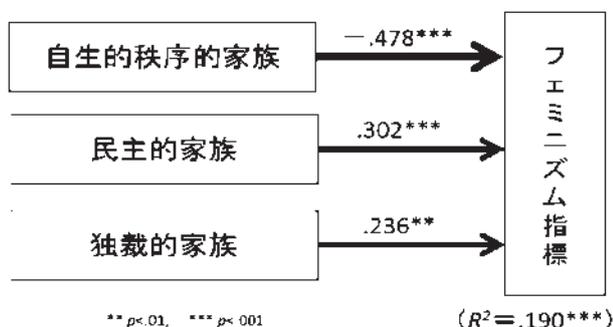


図7 家族 SALAD と家族 PM 尺度を説明変数としたフェミニズム指標へのステップワイズ重回帰分析結果 ($n=221$)

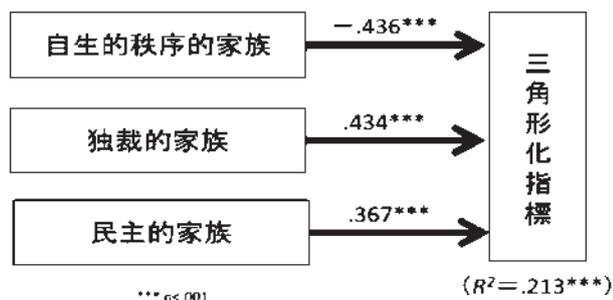


図8 家族 SALAD と家族 PM 尺度を説明変数とした三角形化指標へのステップワイズ重回帰分析結果 ($n=221$)

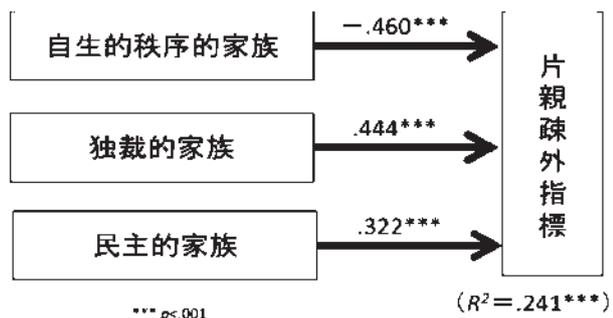


図9 家族 SALAD と家族 PM 尺度を説明変数とした片親疎外指標へのステップワイズ重回帰分析結果 ($n=221$)

【考察／結論】

本研究では、家族 SALAD モデルにおける4種類の家族システムと三隅の家族 PM 尺度や家族満足度、三角形化指標、片親疎外指標等との関連性について検討してきた。

本研究の結果を振り返りながら考察していく。

4つの家族システムと家族 PM 尺度間におけるピアソンの相関係数の検討を行ったが、表2に示されたように、自生的秩序的家族と正の相関が認められた家族システムは民主的家族で、負の相関が認められたのは自由放任的家族であった。加えて自生的秩序的家族と家族 PM 尺度間において有意な相関が認められたのはP尺度とM尺度であり、両方とも正の相関であった。この自生的秩序的家族は、レヴィンとリピットらが行った「アイオワ実験」⁹⁾¹⁸⁾ パラダイムには含まれていなかった体制であるが、家族 PM 尺度のP尺度ともM尺度とも有意な正の相関が認められたことから、集団組織の目標達成機能 (P 機能) と人間関係維持機能 (M 機能) を併せ持つ家族システムである可能性が示唆された。

民主的家族と正の相関が認められた家族システムは自生的秩序的家族で、負の相関が認められたのは独裁的家族と自由放任的家族であった。加えて民主的家族と家族 PM 尺度間において有意な相関が認められたのはM尺度であり、正の相関であった。これは、レヴィンらの「アイオワ実験」⁹⁾¹⁸⁾ と一致する結果であった。すなわち、民主的家族≒民主制は、独裁制より生産性や仕事量は低いが、仲間意識が高く、友好的であることから人間関係維持機能が優位であることが示唆された。

独裁的家族と正の相関が認められた家族システムは自由放任的家族で、負の相関が認められたのは民主的家族であった。加えて独裁的家族と家族 PM 尺度間において有意な相関が認められたのはP尺度であり、正の相関であった。これは「アイオワ実験」⁹⁾¹⁸⁾ と一致する結果であった。すなわち、独裁的家族≒独裁制は、短期的には仕事量が多く、高い生産性をもたらすことができ、目標達成機能が優位であることが示唆された。

自由放任的家族と正の相関が認められた家族システムは独裁的家族で、負の相関が認められたのは自生的秩序的家族と民主的家族であった。加えて自由

放任的家族と家族 PM 尺度間において有意な相関が認められたのは P 尺度と M 尺度であり、両方とも負の相関であった。これは「アイオワ実験」⁹⁾¹⁸⁾と一致する結果であった。すなわち、自由放任的家族≡自由放任は、組織のまとまりもなく、メンバーの士気も低く、仕事の量、質ともに最も低いということが示唆された。

ここで改めて家族 SALAD モデルの 4 つの家族システムと家族 PM 尺度の関連について整理すると、表 2 より、自生的秩序的家族は、家族 PM 尺度の P 尺度と M 尺度の両方と正の相関を示したことから、三隅の PM 理論の 4 つのリーダーシップ・スタイルになぞらえて表記するならば、「PM」に相当すると考えられる。独裁的家族は、家族 PM 尺度の P 尺度とのみ正の相関を示したことから、PM 理論の 4 つのリーダーシップ・スタイルの「Pm」に相当すると考えられる。自由放任的家族は、家族 PM 尺度の P 尺度と M 尺度の両方と負の相関を示したことから、PM 理論の 4 つのリーダーシップ・スタイルの「pm」に相当すると考えられる。そして民主的家族は、家族 PM 尺度の M 尺度とのみ正の相関を示したことから、PM 理論の 4 つのリーダーシップ・スタイルの「pM」に相当すると考えられる。これらの結果に基づいて小野寺の家族 SALAD モデル¹⁴⁾と三隅の PM 理論¹⁰⁾の関係性を図示すると、図10のようになる。

図10より、本研究で検討してきた両理論モデルは整合したということが出来る。先述のように、家族 SALAD モデルと三隅の PM 理論は、両方ともレヴィンとリピットらの「アイオワ実験」から程度の差はあれ影響を受けてきているとはいえ、特に家族

Pm 独裁的家族 A (Autocracy)	PM 自生的秩序的家族 S (Spontaneous order)
pm 自由放任的家族 L A (Laissez-faire)	pM 民主的家族 D (Democracy)

図10 家族 SALAD モデルと PM 理論との関係性

SALAD モデルは、開発するにあたって、十数年にわたる哲学・思想（特に政治・経済・法学）に関わる古典を中心とした文献の精読から得られた知見と世界観が加わっていたがゆえに、意図せざる結果であったといえる。

次に、家族満足度80点以上群と50点以下群間における t 検定の結果から、家族満足度80点以上群のように「良好な家族」においては、家族満足度 50点以下群のように「良好でない（可能性がある）家族」と比べて、自生的秩序的家族と民主的家族が有意に高く、反対に独裁的家族と自由放任的家族は有意に低い値を示した。

加えて、「良好な家族」の方が「良好でない家族」と比べて、家族保守尺度は有意に高く、反対に三角形化指標と片親疎外指標においては有意に低かった。

以上の結果から、自生的秩序的家族と民主的家族の特徴を多く持つ家族システムは、独裁的家族や自由放任的家族の特徴を多く持つ家族よりも、家族満足度や家族の居心地が良くなることが示唆されたといえる。

ステップワイズ重回帰分析より、家族満足度や家族保守尺度などのポジティブな従属変数に対しては、自生的秩序的家族が一貫して、民主的家族が一部、プラスの影響を及ぼしていたのに対して、フェミニズム指標、三角形化指標、片親疎外指標などのどちらかというネガティブな従属変数に対しては、自生的秩序的家族が一貫してマイナスの影響を及ぼしていたことが示された。このことから、自生的秩序的家族の特徴は、家族の満足度や維持・発展にとって促進的に作用し、一方、家族の不満や家族内でのいじめや離婚などの家族崩壊につながる可能性のある要素に対しては、抑止的に作用することが示唆されたといえる。

ここで、アイオワ実験で最も望ましいとされた民主制≡民主的家族について詳細に検討すると、民主的家族は、家族満足度（居心地の良さ）に対してはプラスの影響を及ぼしていたものの、家族保守尺度へはマイナスの影響を及ぼしていただけでなく、フェミニズム指標、三角形化指標、片親疎外指標には有意にプラスの影響を与えていた。このことから、民主的家族は、家族成員間の平等性の確保や自己主張の促進、多様性や寛容の推進という側面にお

いては肯定的に作用しているが、しかし一方で、それによって家族の永続性、凝集性、秩序性、規律・道徳性においては脆弱化させ、家族内で三角形化や片親疎外などの家族内いじめや離婚などの家族崩壊につながりかねない行為（現象）を促進させてしまう可能性が示されたといえる。

以上、本研究の目的の1つ目であった家族 SALAD モデルの4つの家族システム（スタイル）と三隅の家族 PM 尺度との関係性、および家族満足度、三角形化指標、片親疎外指標との関係性については十分検討することができたと考える。

次に、本研究におけるもう一つの考察対象として、4つの家族システム（スタイル）の中で最も望ましい家族システムは、どれかについても検討してみたい。

本研究の結果を概観すると、4つの家族システムの中で望ましい家族システムの候補として考えられるのは、自生的秩序的家族と民主的家族であるが、その中でも最も望ましい家族システムはどちらであろうか。

本研究の特に相関分析と重回帰分析の結果を公平に考慮するならば、自生的秩序的家族が最も望ましい家族システムであると評価することができる。

先述したように、レヴィンらのグループにおいては、民主制、独裁制、自由放任の3つの中では民主制が最も望ましい体制（リーダーシップ）である⁹⁾¹⁸⁾と実証的に論じられてきたわけであるが、本研究の結果を鑑みると、レヴィンらの研究の射程に入っていなかった体制、すなわち保守制≒保守的家族システムであるところの自生的秩序的家族が最も望ましい家族システムである可能性が示唆されたといえる。

この自生的秩序的家族は、ハイエクの家族観⁶⁾¹²⁾でもあるが、歴史的には保守思想の父である18世紀英国のエドモンド・バーク¹²⁾¹⁶⁾やデヴィッド・ヒュームやアダム・スミスらのスコットランド啓蒙思想⁵⁾⁶⁾、日本民俗学の父である柳田国男¹⁶⁾¹⁹⁾やモラロジー（道徳の科学）の広池千九郎¹⁾⁷⁾の家族観と通じていると考えられる。

最後に、本研究の限界と今後の課題について言及したい。

本研究は、大学生を対象とした研究であり、また、質問紙調査から得られたデータを検討したものであ

るがゆえに、本研究の結果を一般化する上では慎重でなければならない。加えて、付録1に示されているように、本研究で検討した家族 SALAD モデル尺度は、信頼性係数 (α) の検討から十分高い内的整合性が認められているが、妥当性の検討は、まだ十分にされていない。したがって、今後の課題としては、家族 SALAD モデル尺度のより精緻な妥当性の検討を行っていかなければならない。

【参考文献】

- 1) 阿南成一 (1987) 『問われる家族倫理：日本の家族 世界の家族』、広池学園出版部
- 2) ドラッカー P. (2008) 『産業人の未来』、ダイヤモンド社
- 3) Gardner R. A. (1998) *The Parental Alienation Syndrome* (2nd edition), Creative Therapeutics Inc.
- 4) Gottlieb, L. (2012) *The Parental Alienation Syndrome: A Family Therapy and Collaborative Systems Approach to Amelioration*. CHARLES THOMAS PUBLISHING
- 5) ハイエク F. A. (2007) 『自由の条件 I II III』、春秋社
- 6) ハイエク F. A. (2007) 『法と立法と自由 I II III』、春秋社
- 7) 広池千九郎 (1987) 『道徳科学の論文 第1巻～第10巻』、広池学園出版部
- 8) カー, M. & ボーエン, M. (2001) 『家族評価：ボーエンによる家族探究の旅』、金剛出版
- 9) 三隅二不二 (訳) (1970) 『グループ・ダイナミクス II』、誠信書房
- 10) 三隅二不二 (1984) 『リーダーシップ行動の科学 (改訂版)』、有斐閣
- 11) 茂木千明 (1996) 家族の健康性に関する一研究、*家族心理学研究*、10 (1) 47-62
- 12) 中川八洋 (2002) 『保守主義の哲学』、PHP 研究所
- 13) David Olson (1989) *Circumplex Model: Systemic Assessment and Treatment of Families*, Routledge
- 14) 小野寺哲夫 (2018) 組織 SALAD モデルから三角形化現象を検討する：グループ・ダイナミクスからの4つの組織政治スタイルに基づく実証研究、*産業組織心理学会第34回大会発表論文集*、63-66
- 15) 阪本昌成 (2006) 『法の支配：オーストリア学派の自由論と国家論』、勁草書房
- 16) 佐藤光 (2004) 『柳田国男の政治経済学：日本保守主義の源流を求めて』、世界思想社
- 17) ウォーシャック, R. (2012) 『離婚毒：片親疎外という児童虐待』、誠信書房
- 18) White, R. & Lippitt, R. (1960) *Autocracy and Democracy: an Experimental Inquiry*. Greenwood Press
- 19) 柳田国男 (2013) 『先祖の話 (角川ソフィア文庫)』角川学芸出版

受付日：2019年9月5日
受理日：2019年11月13日

付録 1

自生的秩序的家族尺度 (19項目)

($M=32.6$, $SD=7.43$, $\alpha=.741$)

- 1 自分の家族は、お盆などには墓参りに行くことが習慣になっている
- 2 自分の家族は、お正月には、親類が集まるのが習慣になっている
- 3 自分の家には、先祖から受け継いだ家訓や自分の家だけの決まり事のようなものがあった
- 4 自分の家では、仏壇が有る無しにかかわらず、定期的に先祖をうやまっている
- 5 自分の両親は、昔の話や亡くなった祖父や祖母の話を聞かせてくれた

独裁的家族尺度 (18項目)

($M=12.9$, $SD=8.17$, $\alpha=.863$)

- 1 自分の家族では、父親か母親どちらか一方が強く、主導権を持っている
- 2 自分の家族では、両親の一方が、家族全体を仕切って(支配して)いる
- 3 自分は、家族一緒にいるとき、くつろぐことができず、常に圧迫されているような息苦しさを感じていた
- 4 自分の家では、自分の意見や気持ちを自由に主張できなかった
- 5 自分の家では、家族を牛耳っている人の意に反した行動は取れなかった

自由放任的家族尺度 (20項目)

($M=16.2$, $SD=8.72$, $\alpha=.848$)

- 1 自分の家族では、両親が親の役割や責任をちゃんと果たしているとは思えなかった
- 2 自分の家族では、両親が子どもを一人ぼっちにさせることが多かった
- 3 自分の家族は、家族らしさが全くなかった
- 4 自分の家族では、家族がバラバラで、まとまりが全くない
- 5 自分の家族では、他の家族メンバーが、今、どこで何をしているかに、関心がなかった

民主的家族尺度 (20項目)

($M=34.3$, $SD=9.58$, $\alpha=.842$)

- 1 自分の家族では、基本的にみんなが自由に発言して、話し合いをすることが多かった
- 2 自分の家族では、大事なことは、家族全員で話し合って決めるのが当たり前だった
- 3 自分の家族では、自分の気持ちや意見を自由に発言できた
- 4 自分の家族では、両親のやり方に対して不満があれば、それを親にぶつけることができた
- 5 自分の家族では、誰が一番偉いというような上下関係はなかった

